

研究ノート

# 子育て支援センター実習を取り入れた 母性看護学実習の検討 — 第 2 報 —

A Study of Maternal Nursing Practicum Incorporating the Practices  
in Regional Childcare Support Centers (2nd Report)

澤田みどり 山口さつき

Midori SAWADA and Satsuki YAMAGUCHI  
保健福祉学部保健看護学科

キーワード：母性看護学実習，看護大学生，子育て支援センター，実習前後からの学び

## 抄 録

本研究は、2019年第1報<sup>1)</sup>をもとに、教育的介入後の「子育て支援センター実習」からの学びの変化と、その学びが学生にもたらす教育的効果を明らかにすることを目的とした。研究対象を、期間内に母性看護学実習を受けた学生が記述したアンケート内容を分析対象にした。結果、退院後の母児及び家族のイメージは「人的サポート」「生活スタイルの変化」などの5カテゴリーが実習前後に抽出され、マイナスイメージの記述が多かった。子育て支援の知識については、「公的支援の場」中心の4カテゴリーから「母親の主体的情報・相談など交流の場」の3カテゴリーへと変化し、育児支援センターの役割や機能が記述されていた。さらに、支援センター実習が臨地実習に役立った内容として、「退院後の母児支援のために提供できる知識」「自分に使える情報・知識」「退院後の母児の生活がイメージできた」の3カテゴリーが挙げられた。結論として、イメージや知識の変化は、第1報とほぼ同じではあるが、今回はより現実的で具体的な言葉で表現されている。また、育児支援センター実習が母性看護学実習に役立った内容・学びとしては、「支援のために提供できる知識や情報」としての「学生の知識の準備性を高める実習」と「自分や友人に有用な知識・情報である」が挙げられた。つまり、子育て支援センター実習は、学生にとって知識の準備性を高めることのできる教育の場であり、さらに自分の身において考え利用できる知識として効果的で、有意義な教育方法であることが示唆された。

## I. 緒 言

少子・核家族化が進む現代、看護学生達は妊婦や新生児に触れる機会や出産にかかわる場が非常に少ない。A大学では、女性のライフサイクルを理解しケアを考えるために、効果的教育方法として2017年から「子育て支援センター実習」を母性看護学実習に取り入れてきた。2019年に学習効果の検証として、実習前後の「退院後の母子及び家族のイメージ」や「子育て支援の知識」に関する学びの変化を第1報としてま

とめ発表し、教育的課題を明らかにした。その後の教育的介入を通して「子育て支援センター実習」を学生のアンケートから振り返り、さらなる学びの変化と「育児支援センター実習」でのその学びが学生にもたらす教育的効果を明らかにすることを本研究の目的とした。

## Ⅱ. 研究 方 法

### 1. 調査対象・調査方法

対象：A 大学で、育児支援センター実習および母性看護学実習を受けた学生が記述したアンケート内容

研究方法：無記名自記式の質問調査を行った。実習前の調査票は、実習前オリエンテーションの際に研究の主旨、強制ではないことを説明した後に配布、回収用封筒を回して回収した。実習後の調査票は、実習終了後に実習担当者が手渡しで配布し、回収は事務室に設置の回収箱へ投函を依頼した。

### 2. 調査期間

2018 年 11 月～2019 年 10 月

### 3. 調査内容

- 1) 病院で出産し退院した母子およびその家族についてのイメージ
  - 2) 子育て支援について知っている事
  - 3) 子育て支援センター実習が母性看護実習に役立った内容
- 以上について自由記述とした。

### 4. 分析方法

実習前後の調査票の記述内容から、退院後の母子および家族のイメージ、子育て支援の知識、臨地実習で活用できた学びの内容を取り出し、2 つ以上の意味を含まないようにデータを区切り、基礎データとした。KJ法の手法を参考にコード化し、各項目の内容を研究者内で妥当性を高めるために検討、サブカテゴリー、カテゴリーと抽象度を高めた。

### 5. 倫理的配慮

第1報より本学研究倫理委員会の承認を得て実施した。第1報同様の手順で進め、回答し返却された段階で同意を得られたと考えた。

## Ⅲ. 研究 結 果

調査票は 65 名に配布し、実習前の調査票は 61 名から回答が得られた（回収率 93.8%）。実習後の調査票は 26 名から回答が得られた（回収率 42.6%）。

### 1. 退院した母子およびその家族についてのイメージ

実習前「退院後の母子および家族のイメージ」につ

いては、68 コードから 5 カテゴリー「子育てへの負担感」「子育てへの人的サポート」「育児不安が生じている」「幸せなイメージ」「子どもが生まれたことによる生活スタイルの変化」を抽出した。実習後は、26 コードから 5 カテゴリー「人的サポート不足」「余裕がない事による生活スタイルの変化」「母親の身体的疲労」「母親の精神的負担・不安」「母親同士の交流の場」の 5 カテゴリーを抽出した（表 1・2）。

### 2. 子育て支援に対する知識

実習前の「子育て支援に対する知識」は、19 コードから 4 カテゴリー「母子保健・公的支援の場」「親同士が集まり交流する場」「地域支援の場」「一時預かりとしての時間的支援の場」を抽出した。実習後は、19 コードから 3 カテゴリー「主体的な情報収集・相談・交流の場」「子どもを預ける場」「公的支援の場」を抽出した（表 3・4）。

### 3. 育児支援センター実習が母性看護学実習に役立った内容（実習後）

育児支援センター実習の学びが母性看護学実習に役立った内容は、27 コードから 3 カテゴリー「退院後の母児支援のために提供できる知識」「自分や友人のこれからに使える情報としての知識」「退院後の母児の生活を知れた（イメージできた）」を抽出した。さらにこの設問に対し学生は、「母親の悩みを聞くことができた」「支援者であるスタッフが信頼できること、自由に参加できる場所があることを知った」「自分のために、また友人にも知らせたい」「支援の実際を知り、母親の悩みや育児不安を知ることで、看護学生としてどのようなケアができるのかを考えた」「子育てに悩む親への支援の場があることを知れた」「育児の現状や、支援の場を知って実習に臨むことができた」「実習で情報として提供できた」「退院後の母児の生活がイメージできた」など具体的な回答を記述していた（表 5）。

## Ⅳ. 考 察

退院後の母子および家族のイメージについては、マイナスイメージが実習前後ともに高い数値を示している。これは、核家族化が進み子育てへの人的サポートが家族内で得られにくく、子育ての負担が母親一人にかかっている現状を実習の中で知り、そのマイナスイメージが「負担」「疲労」「不足」として印象に残ったと考える。「子育て支援センター実習」での母親同士の

表 1 退院後の母児及び家族のイメージ（実習前）

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	n=68	%
幸せなイメージ	新しい家族・幸せ	あたたかい		10%
		家が和む(3)		
		幸せ(3)		
子育てへの人的サポート (協力者・支援者が少ない)	家族・支え・協力	家族が一緒にいる		25%
		家族・夫婦が協力する		
		家の中の役割・生活の変化がある(4)		
		支援を受けながらの子育て		
		子供とか児の両立がうまくできない		
		子育てによる母親の精神的不安やうつ		
	相談相手や頼れる人がいない	相談する人がいない		
		交流する人がいない		
		家族・夫婦の協力者がいない		
		悩みの相談ができない		
		他の母親とのかかわりがない		
		頼れる人が周囲にいない		
子どもが生まれたことによる生活スタイルの変化	母親が子供中心になる	支援が少ない(2)		7%
		子供中心の生活		
		子育てを乗り越えていく		
		常に子供のそばにいないといけない(2)		
子育てへの負担感 (心身)	母親への負担感・疲労 大変そう	子供のことで頭がいっぱい		37%
		子育てでの知識が浅い		
		母親一人に負担が多く、大変そう(6)		
		心身共に大変そう・疲労 (11)		
		母親の負担が大きい		
	時間的負担	家族も疲労する		
		忙しい(2)		
		困難が多い		
		時間に追われる		
		時間に余裕がない		
育児不安が生じている (精神)	不安が強い	初産の場合不安が強い(2)		12%
		不安が多い(5)		
		不安や解らないことが多い		

表 2 退院後の母児及び家族のイメージ（実習後）

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	n=26	%
母親同士の交流の場	楽しい 交流の場	楽しい		8%
		利用している人たちの場		
子育ての人的サポートの不足	母親に子育ての負担がかかる	子育てが大変(6)		65%
		孤育(3)		
		児の世話を一人でしなければならない		
		自分から積極的に動かなければならない		
		負担が大きくなる(3)		
子育てが母親の負担(精神)	ひとりでは不安・負担	自宅では母親一人で(3)		8%
		不安が大きい サポートが必要		
母親の疲労(身体)	心身の疲労	忙しくて大変 疲労がたまる(夜泣きで)		8%
子育てに集中・余裕がない (生活スタイルの変化)	子育てに集中する	子育てに集中してしまう(2)		12%
		育児が未熟		

表 3 子育て支援に対する知識（実習前）

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	n=19	%
親同士が集まり交流する場	育児の相談や意見 交換の場	育児に関する悩み相談ができる場		17%
		母親同士の交流できる場		
		地域で他の母や家族と交流や意見交換の場		
時間的支援の場	情報提供 預かりの場	情報提供		11%
		一時預かりしてくれる場		
母子保健事業・公的支援の場	相談・指導の場	育児相談(4)		63%
		授乳相談 母親・両親学級(3)		
	保健指導の場	家庭訪問(3)		
		健診		
地域支援の場	地域支援活動の場	子供会・児童館 児童館に母親と子供が来ていた(体験)		11%

表 4 子育て支援に対する知識（実習後）

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	n=19	%
公的支援の場	公的支援の場	子育て支援センター(3)		21%
		家庭訪問		
子どもを預ける場	こどもを一時預ける	子供と離れる時間ができる(4)		26%
		預かってくれる		
母親が主体的に情報・相談・交流の場	主体的交流・相談・支援の場	子ども同士の交流の場(3)		53%
		母親同士の交流の場		
		情報共有の場(3)		
		相談する場(3)		

表 5 育児支援センター実習が母性看護実習に役立った内容（実習後）

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	n=27	%
退院後の母児支援のために提供できる知識	実習の場で使える知識 情報としてとらえた	実習の場で利用(2)		52%
		子育てに悩む親への支援の場のあることを知ったうえで実習できた		
		退院後も支えとなってくれる場があるという情報提供ができる(2)		
		産後サポートが必要になった対象に提案できることを知って実習		
		母親の育児経験を聞くことができあらかじめの情報を得られた		
		母親の悩みを知れた		
	そのうえでどのようなケアが必要かを考えられた			
	退院後の支援のための 情報	退院後の情報提供		
		退院後に行く場所の一つとしてサポートの一つ		
		情報提供		
		支援の実際を知れた		
		相談できる場所		
情報伝達として役立つ				
退院後の母児の生活を知る	退院後の生活をイメージできた	退院後の母児の生活がイメージできた(2)	11%	
	メリットが聞けた			
自分に使える情報として知識	自分の生活や今後に役立てる情報と理解	友達に紹介できる(2)	15%	
		将来の自分の子育てに役立つ(2)		

情報交換や悩みを共有する現状を体験学習しその意義を認識するが、臨床での支援センターの存在と普及が十分でないことを体感、結果、マイナスイメージのまま数値となって表れたと考える。特に、「子育てへの人的サポート」については、実習前の25%から実習後に65%と増加しており、退院後の母子の現状を実習を通して認識した結果と考える。唐田順子ら<sup>2)</sup>は、地域子育て支援施設実習を組み入れた教育プログラムの効果の中で「学生の学びは、地域子育て支援施設実習で見学した具体的な経験から、現代社会の特徴と地域子育て支援施設の意義、などへの抽象的な学びへと発展し学ぶ。」と体験学習と社会の特徴を統合し考え、支援・看護ケアへとその考えを広げることができると、その効果を述べている。本研究でも、育児支援センターでの学びが退院後の母子の生活と育児支援の実際・現実を合わせて考えていることがわかる。

知識については、実習前は座学の中で学んだ「行政主体の支援の場」という理解が中心であったが、実習後は「母親同士の交流の場」や「情報提供の場」、「子供を預け休息の場」など支援業務内容が具体的に記述され、子育て支援センター本来の役割、機能を正しく

理解し観察していることがわかる。

第1報では、「具体的な退院後の母児の状態を把握し明確にとらえたうえで、子育てのサポートの必要性を実感した」と、その学びを明らかにしていた。しかし、支援センターでの学びが母性看護学実習ではほとんど生かされることはなく、今後の課題として学びを実習の中に取り入れられるような助言、指導が教育的課題として挙げられていた。

今回、第1報での課題解決のために「育児支援センター実習」の学びを「母性看護学実習」に繋げられるような教育介入を行った。これらの教育介入は従来より行われてきたが、より長期的に周産期看護として「育児支援センターの学び」を継続できるよう、意図的に介入を心がけた。その結果、学生は具体的な表現で現実の母児を捉え、退院後の母児及び家族のイメージをより現実的、具体化することで、ケアへと繋げている記述内容から、考えの広がりや変化がみえていた。出産の減少に伴い、臨地実習の場で学ぶ内容は少なくなり、多くの教育機関では、VRの導入といった仮想学習が進んでいる。文部科学省の看護学教育モデル・コア・カリキュラム構成<sup>3)</sup>の中で、臨地実習につ

いて「学生は、その体験から内省的考察を持って学習効果を高め学ぶ。そのため、教育者は適切な実習の場や教育の工夫をすることで学習効果を高める必要がある」と、実習における体験学習の重要性と教育的介入について述べている。今回、実習後の「育児支援センター実習が母性看護実習に役立った内容」という設問で、「提供できる情報を持って実習に向かうことができる、知識の準備性」と、たんに実習で利用する知識だけではなく「自分や友人の育児に有効な知識、情報」として本実習を認識していることが明らかになった。

(表5参照) この学びは、母性看護学の実習目標である「マタニティサイクルにある母児を含め、自分をも含め対象に行われる看護実践と看護過程の展開の中での基本的看護を学ぶ」という目標に「育児支援センター実習」が合致し、効果的な役割を果たしていることが明らかになった。しかし、学びを活かし長期的視野を持った看護ケア(指導)が考えられない学生も多い。今後も育児支援センターでの学びを取り入れられるよう助言、指導の教育的介入の継続が課題となる。

## V. 結 論

子育て支援センター実習での学びは、退院後の母子及び家族へのイメージが、より現実的で具体的な学びとなっている。知識では、育児支援センターの役割と機能を正しく理解していることが分かった。つまり、子育て支援センター実習は、母子への具体的イメージを持ち子育て支援への知識の準備性を高め臨地実習に臨むことができる。また、自分のこととして考え利用できる知識・情報として有効かつ効果的な教育方法であることが示唆された。

## 引 用 文 献

- 1) 山口さつき, 澤田みどり: 子育て支援センター実習を取り入れた母性看護学実習の検討, 旭川大学保健福祉学部研究紀要, 11巻, 15-21, 2019.
- 2) 唐田順子, 大賀明子, 畑野花奈: 地域子育て支援施設実習を組み入れた母性看護学実習の教育プログラムの効果ー学生の長期的な視点を育むための試みー, 母性衛生, 第56巻, 4号, 667-676, 2016.01.
- 3) 文部科学省 (2017): 看護学教育モデル・コア・カリキュラム [https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1217788\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1217788_3.pdf)(検索日 2019年12月24日)